

コンビニ（ロドス支店）開店しました

式 叡月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ロドスの中に開店している店。

それはどこにでもあるコンビニの外見をしている。

しかし売っている物は、この世界の物とは違う世界で、作られたものだ。

源石がなく、鉱石病もない世界。

そこからテラへ、ロドスへ来た男の日常。

病人だろうと、異世界人だろうと関係ない。

戦争にならない為に、親を助けるために

今日も男は働く。それが目的に繋がっていると信じて。

ちよいと気になりだしたので作り直し中

国によって更に章を別けますね。

場所が分かるように

目次

ロドスで営業中	
コンビニ営業してます	1
訓練と授業と雑談	9
本格的な協力と出発	19
ペンギン急便と楽しもう。	28
酒好きと屋台	35
花と野菜と畑	43
神と人と狐（ヴァルポ）	50
キララとマリオのRPG（冒険）	60
イエラグ編	
イエラグに出発 開店準備	68

ロドスで営業中 コンビニ営業してます

初めまして、縁乃下 望です。

皆さんは自分が住んでいる以外の、世界があると

思ったことはありませんか？マンガやゲームの世界の話だと

自分も思っていました。

異世界に繋がる扉が現れなければ。

扉の存在により、各国が混乱。

対処するために各国は、話し合いの為の会議……世界（ワールド）
会議の開催が決まった。

出席するのは各国のトップである。

「集まりましたね？それでは会議を始めましょう」

「まずは情報を集めねばなるまい」

「兵士を派遣するの？そんな事をして、何か

あつたらどうするつもりだ！」

「扉の向こうがどんな世界か分からん事には

どうしようもないだろ！」

話し合いは中々進まず、一旦終わったのだが

一部が強行して、偵察の為に扉の向こうへ。

すぐさま、国が会議で別部隊の派遣を検討

しようとしていたが、先の部隊が戻ってきた。

ボロボロの状態で。

帰ってきた部隊の証言は、信じられないものだった。

それ以降、扉の使用は禁止された。

まあ、こうしてテラの世界に来ているんだけどね。

表向きは危険だから禁止という事だが、異世界の

事情を考えれば、そうはいかなくなった。

異世界の世界、そこはテラと呼ばれ、鉱石病という名の

病気になる世界。

感染した者は皮膚や臓器などに鉱石を発症し、最後には体全体が鉱石となって消える、そんな病気だ。

それに加え、こちらの世界は傭兵や国が陰謀で戦争中だったりと、他人事ではない。

情報収集や事前対策をしたいのだが、どの国も信用するには結局情報が足りない。そんな時に、別でもう一枚、扉が発見された。

その扉は特別なのかチェスのルークのような形が彫られていた。その先が今、自分が働いている店の移動都市である。

移動都市とは、テラの住人が天災を避ける為に開発した動く都市である。

鉱石が天災を発生させるのか、引き寄せるのかはわからない。

天災（竜巻、隕石落下）を避けるために都市自体を動かすのだ。

天災が発生しない所もあるが、それはそれで環境によっては苦しいのだ。

自分は現在、ロドスアイランドと言われる製薬会社の中に店（コンビニ）を経営している。

ロドスアイランド、ドクター、ケルシー、アーミヤのスリートップが運営する製薬会社である。

ケルシーが医療部門トップ、ドクターが戦術指揮、会社の社長としてアーミヤである。

製薬会社に戦術指揮はいらなだろうと思われだろうけど戦いや殺し合い、暗殺や略奪がある世界では防衛力も必要なのだ。

「これ位でいいかな」

今は開店準備を進めている。店で働いているのは自分だけだ。誰も危険な場所で、働きたいという人は

いないだろう。

店内はよくあるコンビニと変わらないが、扱っている商品は違う。

例えば、テラにある土は源石を含んでいるので、源石を除去しなければ使えない。その点、地球の土は用途に合わせて既に別けられているので、買って即使える。

水は消毒液や飲料、生活にも使われるので、箱かタンクで買われることが多い。

源石を含まないだけで、テラの住人からはありがたいのだ。

技術に関しては作り方も含めて売られている。

これは戦争が地球に來ない為にも、政府が会社側に頼み許可されたものだけが、販売の対象だ。

どこでもあるものは多いが、その会社だけが作ったりしているものは

会社と政府の話し合いにより、決められる。

政府が調査して、信頼ができると決められた会社にはテラで作られた許可書が渡されるので、絶対に真似はできない。

という感じである。

基本的にはお金での取引なのだが、地球に渡し続ければ紙幣がなくなってしまうので、独自の硬貨や紙幣が作られている。無理な場合は物々交換するしかない。

「開店まで時間あるし休憩しとくか」

店員兼店長なので営業時間は自由に決めてある。

ただし、開店する時は連絡を忘れず、色んな人に利用してもらえるように、朝、昼、夜と変えている。

忙しい人ように、予約兼預りもしているので、帰ってきて直ぐに受け取れる。

コンコン 「失礼します」

おや、こんな時間に珍しい子が来たみたいだ。

「アーミヤさん」

「もう！さんづけはいらないって言ってるじゃないですか！」

いやいや、そうもいかないからね？

彼女はアーミヤ、ロドスの社長だ。

前の会社の社長（テレジア）さんが亡くなって、自分から社長に立候補したとか。

社員（オペレーター）達が彼女を支えている。

ロドスはその人の理念などを元に行っているとか。

「ごめんごめん。それで、何の御用かな？」

開店前だから商品ではないようだけど。

「これから会談なんです、髪の毛の寝癖が治らなくて」

アーミヤの髪の毛の一部がびよこつと立っている。

「それならこれを使おうか」

ダンボールから取り出したのはヘアアイロン。

髪に使うアイロンだ。寝癖やお風呂後の髪を

乾かすのに使われる。

カチ 「少し待たないといけないけど、大丈夫かな？」

「はい問題ありません」

そう言っただけで膝に座ってくるアーミヤ。

えーつとなぜ膝？

「ダメですか？」

ダメじゃないんだけど……まあ、いいか。

「えへへへ」

妹がいたらこんな感じなのかな？いや、姉かもしれん。

発電機を持ってきているので、それにコンセントを挿し、ヘアアイロンが使えるようになるまで待つ。

〇〇分後、アーミヤの髪にヘアアイロンを使い

寝癖を直す。

アーミヤはそのまま会談に向かっていた。

「こっちはそろそろ開店だな」

シヤッターを上げ、開店中の看板を出す。

待っていた客（オペレーター達）が店の中へ。

買うも物が決まってる人は目的の品へ、決まってない者は見ながら決める。

「酒のおつまみっていったら、柿の種だろ！」

「いやいや、この沢山種類があるスルメもいって！」

「また新しい化粧品が出てる！」

「ええー、私この前同じ効果の物買っちゃったー！」

「店長さーん、こんな商品ありますか？」

常に忙しい毎日だ。それでも働いているのは

親の病気を治すためだ。

給料に加え、テラの情報（病気や家の建築法、料理や戦闘方法等）でボーナスや追加報酬などが支払われるので、こっちで働いたほうが稼げる。

一日でも早く治ってほしくて、こんな危険な仕事をしているが後悔はしていない。

自分を産んでくれた親に応えるのは、子供として当然だ。

「あるよ。ちよつと待っててねー」

彼らが少しでも長く生きれますように。

希望を消さない為に。

ふうー今日も繁盛したな。

客がいなくなり、店が静かになる。

明日は店を休みにするつもりなので

残っている商品は片付ける。

レジのお金も回収、回収つと。

全部が片付け終わった時。

「失礼する」

医療部のトップである、ケルシーがやってきた。
猫（フェリオン）の特徴である耳はあるが、尻尾はない。
もしかして普通の猫とは違うのかも？まあ、地球にも希少種な猫は
いるし、気にはならない。

ケルシーは主に医療品を注文する。

手を消毒するアルコール洗剤、手術に必要な道具などは
ケルシーから自分に注文を直接言ってくれる。

「移動都市で暮らす者には問題はないが、そうでない者は
野生の生物に襲われるからな。最近はどここの研究者かしらないが
生物に薬を投与して、暴れさせ、治して治療費を強引に
支払わせる者が出てきた」

たしかドクター達はその任務に出てるんだったかな？

後は扉の出現で、混乱や変化がないかの調査だったはず。

「そちらの物資がなければ、助からない命もあつただろう。

アーミヤ達が感謝していたよ」

「助け合いはお互い様ですよ」

地球では医者には長袖長ズボンなので問題ないのだが、ケルシーの
恰好は露出が多いので、大変（男として）困る。

ズボンだけでも履いてくれないだろうか？

「ダメだ。これではいけな理由がある」

うーん、そう言うなら仕方ない。諦めよう。

しかし露出が多めの服でなければいけない理由か……。

男が集中できなくなるとか？

（効果抜群だろうか）

流石に医者であるケルシーが前線で戦うとかないだろう。
ないよな？テラだからもしかしたらあるのか？

「勉強は進んでいるか？分からない事があれば

私に相談してくれ」

ケルシーには歴史とこちらの医療について

授業をしてもらっている。流石に子供に混じるのは
恥ずかしいので、個人授業だ。

机に向かって二人で勉強……学生時代にしかかった。

「む」

ギョツ

頬を引っ張られた。

「集中するように」

怒られてしまった。

二人で勉強しているとアーミヤがやって来て

自分とケルシーの間に入ってきた。

「私だつて教えられますよー!」

うん、わかったから手を放してほしい。

ノートを抑えてるだけなんだけど、やりづらいよ。

その後は三人でコーヒーを飲み、解散した。

アーミヤです。

何回やっても寝癖が直りません。

「店長さんなら直す道具持つてるかな?」

異世界から来て、店を構えている地球という所から

支援をしていただいている地球の方。

優しくて、テラの事を調べて、優先度の高い物を

積極的に集めていただいています。

水は生活で最も使います。ですが、テラでは源石があり

飲み水等に使うにも、処理が大変です。

地球の水は綺麗です。雨が山に降り、村や町に流れるまでに

山の中で浄化されます。テラでは考えられません。

土も向こうでは沢山あるそうで、パフューマーさん達が

帰ってきたら喜んでくれるでしょう。

「店長さん、会談があるので寝癖を直したくて」

へアアイロン……そんなものがあるなんて!

電気を熱に変換して、アイロンみたいに使うとは!?

地球の技術も侮れませんか!

会談も終わり、店長さんにお礼を言いに来たのですがケルシー先生と仲良く二人で授業をしていました。

「アーミヤ、あまり店長を困らせてはいけない」

「では膝なら問題ありませんね」

ふふふ、膝なら問題ないはずです。

ケルシー先生どうですか？大人のあなたには出来ないでしょう。

この世界（テラ）にやってきた、一人の男。

彼は店を構え、歴史を知り、病気を知る。

彼に出来る事は物資の供給と最低限の生活を維持させる事だけ。

それが戦争をさせない事に、繋がり続けるかは皆の協力次第だろう。

異世界と世界が争わない為に、今日も男は店を営業する。

訓練と授業と雑談

今日の朝はドーベルマン教官に鍛えてもらう日だ。訓練で必要な道具はロドスが用意した物を使っている。

訓練室に着くと、ドーベルマンが待っていた。荷物をベンチに置き、彼女の元へ

「今日はよろしくお願いしますー！」

ドーベルマン教官のメニューはキツイ。

しかしその分、効果は確実に出ている。

人間に合わせたメニューで厳しいがテラで生きていくには必要なんだ。

ロドスに滞在を認めてもらう時は死ぬかと思っただよ。

「待っていたぞ。まずは準備運動からだ」

軽く準備体操をして、まずはランニング。

「10週だ。始めー！」

合図と共に走り出す。学校のグラウンドの半分の円が描かれた白線の横を走る。

後ろからは教官もついてくる。

弛んだりしたらムチでひっぱたかれる。

「そのペースのまま維持しろ」

戦闘員ではないので指示アリでの訓練。

たまにクルースとラヴァが羨ましいそうに見てきた時もあった。

五周からペースが落ちてきた。

パシン

叩かれてしまう。元は一般人だから

まだ、訓練には慣れていない。

今は訓練に耐えられるようになりたい。

10週終了後

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

「よし、休憩してくれ」

少しの休憩時間。これが大変ありがたい。

ドーベルマン視点

彼がロドスに着て、訓練は私はずっと

面倒を見ている。

最初は全然ダメだったが、今では多少はこなせているだろう。と言っても、地球の人間レベルではの話だが。

身体能力に差があるから、考えるのには苦勞させられた。

地球と共存するには必要な考えであるが。

「よし次の訓練だ」

戦闘は無理だから防ぐ事を徹底的に教えている。地球は物が溢れていて、狙われやすいだろう。だから、荷物を持った状態で走らす訓練もある。

「よし」

重りが入ったりリュックを背負うのを確認してから、ランニングを開始する。

さつきは五周で乱れたが次はどこまで持つか。

「ふう・・・ふう・・・ふう」

人間の適応力には驚いた。

慣れが早いのだ。

全てがそうではないのだろうか、彼は

私のメニューに適応してきている。

少し乱れたが走りきったのは見事だ

「無理はするなよ」

私は一人の人間の訓練を指導するようになった。

人生でこんな経験は絶対ないだろう。

何故なら彼は異世界の人間だから。

主人公視点

朝から昼までの訓練が終わった。

昼からはケルシー先生に歴史の個人授業を開いてもらっている。

訓練後の休憩と食事を済ませ、私室で待っておく。

「準備はできているか？では始めよう」

ケルシーの解説は言っていることが分かれば理解しやすい。逆に分からないと難しい。

初めての時は源石や鉋石病を中心に教えてもらっていた。

「ロドスは製薬会社だ。戦闘員がいるのは

患者や自分達を守る為にある。我々の成果を盗もうとする者もいるだろう」

「自衛は必ず必要と？」

「君が外に出るか私達が決めるわけでは

ないのだが、外を見れば考えは変わるだろう。

ドーベルマンには外に出ること前提で

話してある。無駄にはならないはずだ」

先を考え教えてくれるのはドーベルマンと一緒にケルシーは必要以上の事は語らない。

「シエスタなら君が行っても問題はないだろう。

ロドスのオペレーターに出身の者がいるから帰ってきたら、聞いてみるといい」

シエスタは海、正確には湖らしいのだが

そこで音楽フェスを開催してる。

有名アーティストが集結するから、他の移動都市からも沢山の人が観光、バカンスにやってくる。比較的平和な都市。近くの火山が噴火しそう

なのをロドスが防いだ。

「そんなことまで」

「本来なら休暇で立ち寄ったのだがな。

まったく」

どうやら巻き込まれる体質の持ち主が、ロドスに
いるみたいだ。ケルシーは呆れている。
帰ってくる時はしつかり挨拶しないと。

「話が逸れた、すまない。授業の続きを

しようか。店長」

オペレーターにはコードネームを名乗らないと
いけない決まりがある。後方や支援が主で
店を営業してるから安直に決めた。

ロドスにも店を営業してる人達がいるし。

誰がとは特定はしにくいハズ。

後、ケルシーが謝る時に前屈みになったせいで
胸チラしかけていた。いや、そんなミニスカ
ワンピースはなんだと。肌の露出がヤバイって。
ケルシーの服は戦闘をする時に召喚、呼び出す
存在に合わせたもの。

本人はまったく動じていない。

ドキドキしながら今日の授業を過ごした。

ケルシー視点

「・・・と言うことだ」

私はケルシー。ロドスの医療のトップであり
ロドスのリーダー格の一人だ。

今、私は異世界から来た人間を相手に

テラの歴史と医療について、個人授業を
している。

頭が良いわけではないがノートに毎回びっしり
書いて、次までに復習、予習をしてくるのは
偉いと思う。

お互い戦争にならないために、支援と

提携を約束している。

医療品を大量に貰うことができ、ロドス全体の消費が抑えられた。つまり、毎回負傷して帰ってくるブレイズを筆頭に、別の選択肢が増えたのは大きい。

食品ロスも多いらしく、余り物を持ってきた時は部屋にパンパンに詰め込んだ。

特に水と土は貴重なのでそれだけは毎回送るように伝えてもらっている。

「今日の訓練だが、慣れてきたから

1段階難しくしようと思うが、ケルシーはどう思う?」

「授業中に支障がないなら問題はない」

前は机に突っ伏していることが多かったがそれは徐々になくなった。

「ロドスにメリットが多いが向こうも

必死というわけか」

「暫くは彼だけで十分だ」

「そうだな。私の事を怖がる者もいるだろう。

彼は尊敬の眼差しで見えてきたが」

「む。私は見られていないが」

「診察や手術以外に活躍は分かりづらいからな」

「なるほど、今度は医療部前で授業を試してみるところでしょう」

主人公視点

二人が話し合っている頃、店長である

縁乃下 望はレポートを作成していた。

「テラで水と土に源石が混入してないのは

大変貴重であり、争いに発展する可能性が高く。

また、地域によって危険度が変わるため
注意が必要」

纏めたレポートは帰った時に提出が義務付け
られている。だから、忘れないように書き
終わったらガバンに仕舞う。

「久しぶりに帰ろうかな」

次の日、アーミヤに一度帰る事を伝えた。

「向こうの皆さんに宜しくお願いします。」

それから、これを」

紙が1枚渡された。どうやら商品の追加
要望書みたいだ。

「分かった。話を通してくるよ」

どこにでもあるようなトビラを開け、光の
中へ歩き出す。

先は部屋になっている。

今、使用したトビラがテラと地球を繋ぐ
唯一の手段。

出入りできるだけの物だが、それが複数個
存在している。

帰ってきた事を知らせるボタンを押し

皆が出迎えてくれる。

「おおー久しぶりじゃの。元気じゃったか？」

「ええ、お酒の件は助かってます。自分は
飲まない方なので」

「なーに、飲兵衛が役に立つなら構わんよ。
ほっほっほ」

「また一段とガタイが良くなったな。あの
教官にしごかれてんのか？」

「ええ、まあ。何かあった時は大変ですから」

「ふふ、望くんは頑張り屋さんね」

「お帰りなさいませ。どういたしましょうか？」

「先輩の話を聞きたいっす！」

「はい、はい。後で聞かせてやるよ。」

まずは報告しないとイケないから
怒られたくないから

「分かりました。軽い食事のご用意を

しておきます。終わったら迎えにあげます」

通信の為の部屋へ。

パソコンと周辺機器だけが置かれた部屋。

デスクトップはかなりデカイ特注だ。

「戻ったかね」

「はい、ただいま」

写し出されたのは現総理のその人。他には

各国のトップと軍関係者。

「報告を聞こうか」

今日までの事を報告。レポートはFAXで送り

目を通される。

「友好を結べたのは君のお陰だ。何か褒美が

欲しいかね？言ってみるといい」

「追加の支援をお願いします」

「う、うむ。いや、君は何かないのかな？

有名な女優やモデルと会ってみたいとか。

ほら、何かあるだろ？」

「いえ、今はテラの人達を優先したいので

大丈夫です」

「そ、そうか」

各国の要望、うちはこれ調べてとか

これ紹介して等、日本側に要求を

頼み、代わりにこっちで融通すると。

話が終わり、皆で食卓を囲む。

「酒もワインも準備はできとる。」

「いつでも仕事を持ってきてくれ」

「まだ帰っては来ないので忙しくなるのは先になりそうですよ」

今後の予定や何をしていくかを話し合った。次の日にロドスに戻る。

シャッターを叩く音が聞こえ、上げるとアーミヤが待っていた。

「えへへ、ココア飲みに来ました」

ガシツと抱きついてくる。

嬉しいけどあまり良くないと思うんだ。

「ドクターがいない間は甘えさせてもらいます」

幼いながら社長をしているのは凄いと

思うし、無理もしてほしくないんだけど。

ポスツ

膝の上に乗っかってきた。

「ココアおいしいです」

「それは良かった」

で、ケルシーとドーベルマンは何時から

そこに居たのかな？

「私もコーヒーを飲みに来た」

「私もだ」

アーミヤを預け、二人にコーヒーを作る。

手渡した。

「次からは1段階難しくするから

覚えておくように」

「授業は今まで通りにしていく」

質問はあるか？

ハモって言われるとちよつと圧を感じる。

問題ないと返しておく。

「あゝ皆で飲んでるゝ」

クルース達がやってきた。ラヴァは引っ張られて

連れてこられたようだ。

メランサは相変わらずオドオドしてる。

「カーディは機械に触れないでね。

弁償は嫌でしょ」

簡単な操作なのに何故壊すんだ。

「あつ、スイーツの作り方の本ありますか？」

アドナキエルはスイーツを作って持ってきてくれる。

なんだかんだロドスでやれています。

次の日、ロドスを離れていた人達が帰ってくるかと伝えられた。

世話になってるのでお菓子やジュース

酒類はこちらで用意させてもらおう。

「よいしょつと」

「これ全部いただけれるんですか！」

「揃ってから食べてね」

運び込むのは手伝ってもらった。

お礼として、高級なスイーツをお取り寄せさせてもらった。

「このスイーツはたしか、銀座にある

老舗のやつでは？」

「そ、それってお高いんじゃない」

「気にしてはいけませんよ」

「まったくハリキリすぎよ」

「ポップカルも頑張るよ！」

本は売ったり、貸し出しもしているから

1人が知れば話題になって、食べたくなるよね。

「五箱買ってきたから慌てないでくださいね」

皆に一個ずつ配ったが、余った時の争奪戦で
女子のスイーツに対する本気を見た。

とくにオーキッドさんはガチだったよ。

アドナキエルが勝ったのは当然か。

「再現してみせます！」

無理はしないよね？

本格的な協力と出発

アーミヤ視点

「お帰りなさい。ドクター」

「ただいま。アーミヤ」

ドクター達が帰ってきた。

アーミヤはすぐに会いにドクターの元に
向かった。

出迎えの挨拶が済んだ。

「それですね。出発する前にケルシー先生
と話し合っていた異世界の件なんですが、
私達を支援してくれる事になりました。

人員が1人来てます」

「そうか。なら挨拶しておかないと
ダメかな。何処にいる？」

「それなら大丈夫です。歓迎会と交流会を
同時にするので、その時お願いします」

「わかった」

アーミヤとドクターの会話が終わると

アーミヤの後ろから抱きつく人物が

1人いた。

エリートオペレーターのブレイズだ。

「きやあー！」

「寂しかったよ子ウサギちゃん！

甘えさせてね！」

スリスリと頬を合わせて頬擦りするブレイズ
に注意しながらも、結局はさせてあげる

優しいアーミヤ。

「ブレイズさんも失礼がないように

お願いしますね。ちよつと！聞いてますか!？」

「聞いてるよ！お姉さんにまっかせなさい！」

「本当に聞いてましたか!？」
「やれやれ」

今日もロドスは平和である。

ドーベルマン視点

「じゃあドーベルマンが担当してるのね？」

「ああ、根性はあるから中々教えがいが

あつてな」

「へ〜！じゃあ私も担当しようかしら」

「あら、じゃあ三人でしましょう」

「まっ、待て！何故教える前提になってる！」

共同で教えることにドーベルマンは

異議を唱える。

今まで二人でやってきたからか、独占したい

みたいだ。

それを許すジュナーとウイスラツシユではない。

「独り占めはダメよ。ドーベルマン」

「そうね。私達は同じ教官仲間なんだし

もちろん、いいわよね？」

「むむむ」

反論に唸るが強引に押されて許可して

しまった。

「仕方ない。ただし、抜け駆けはなしだぞ！」

「はあ〜い」「わかったわ」

本人がいない所で色々と決まってしまうた。

主人公視点

「よいしょっと。テーブルはこれだけ？」

「そのようです。後は椅子と料理、飲み物

が足りないかと」

「わかった。冥さんは料理の手伝いに

行ってきた。

「こつちは何とかするから」

「畏まりました」

頭を下げて一礼してキッチンへ向かってくれた。こつちは椅子を配置しないと。

「センパイ！椅子を持ってきました！」

「わかった！夜までに来ればいいから
しっかりとやろう」

「わかったっす！」

「酒類も届いたぞ。ワシが厳選したから
楽しんでもらえるじやろうて」

「じゃあ飲み物類を置くところに

お願いします！あつ！ジュースとは

離してくださいね！」

「わかっておる」

あつちこつちと動きながら指示を出して
準備を進めていく。

ロドスにある部屋では皆が入りきららない
のでこつちのホールを使うことに。

料理は女将の桜さんとメイド長の冥さんを
筆頭に頑張ってくれている。

問題はいまのところない。

飲み物はコーラ、ペプシ。それから

お茶、紅茶って

「ティーパックと粉の確認しないと！」

さつそく発生したよ。ちきしよう！

急いで確認しなきゃ?!

空き部屋の中に置いてあるダンボールの
中から、目的の物を見つけ帰る途中。

料理場の横を通って中を確認したら
慌ただしく動いていた。

「時間が掛かるものから優先して

ください！すぐに出来る料理は後で！」

「急がず慌てずしていきましょーね〜」

二人を筆頭に頑張っているな。

すると大量の女性達がやってきた。

「政府の者です！手伝いに来ました！」

「味付けや盛りつけは私達が！」

「作れる人もいるのでご指示を！」

ありがたい増援だ。でも誰が呼んだんだ？

「ワシじゃよ。交流から失敗するわけには

いかんからな。・・・望君だったか

期待しているぞ」

「はい！」

外交を任されている人が手配してくれていた

ようだ。男子の方もいるみたいだ。

なんとしても成功させないと。

なんやかんやで準備は間に合った。

そしてオペレーターの方々が入ってくる。

イケメン社長にその姉妹と部下。

悪魔の尻尾や角、見た目の人。

尻尾が大きい少女。

様々な種族、国出身のオペレーターが

やってきた。

これからその人達の前で説明しなきゃと

思うと

(緊張してきた)

心臓がドクドク鳴っている。

でもお互いが協力する為に説明は

大事なんだ。

明かりが消え、壇上の上から吊るされた物に

写真が写し出された。
それが始まりの合図だ。
まずは挨拶。

「え、初めまして。自分がロドスで
お世話になる縁乃下 望です。」

コードネームは店長なので、ロドスで
会った時はよろしくです」
それから支援について。

「支援につきましては水と土が主になって
いますが要望があるなら、この場で言って
もらって構いません」

「いいかしら？」
どうぞパフューマーさん

「土は何用のかしら？」
使用が多いため、お渡しした土は
使用者が好きにしていただけいて構いません。
足りなければ言っていただければご用意
させていただきます。花の種も必要
でしょうか？」

「あら、嬉しいわ。なら種もお願いしよう
かしら？ふふっ」

笑顔でお礼を言うパフューマー。
頬に手を当て顔を傾げている姿は綺麗だ。
ある程度のプロフィールは教えてもらって
いて、今日の為に答えられるようにした。

「ねえねえ！食べ物沢山貰えるの?！」
「こちらでは食品ロスが多いので

ロドスの中で、消費しきれるか分からない
量がございます。

ロドスが助ける患者達に配るのも
問題ありません。

注意事項についてはケルシー先生に一任してますから、ご確認ください」

ケルシーに視線が集まり、彼女が頷く。

「水は使用用途が多いので飲料水とは

別で用意させていただきます」

他に質問はありますか？

「じゃあさせてもらおうかな。

君達が私達を支援するのはなんで？

戦えない訳じゃないんでしょ？」

「たしかエリートオペレーターのブレイズさんだったか。

彼女の質問は分かる。戦えない訳じゃ

ないのにロドスと協力しようとしているんだ。

疑いを持つのは当然の考えだろう。

「地球には『誰でも使える銃器』があります。

人間だけでは持ち出しを守りきれないでしょう。

それにテラの種族、クランタの方には

申し訳ありませんが、足が速い種族が集団で

使えば脅威になります。それとこれを

見てください」

それは写真をパソコンのケーブルを通し

プロジェクターが映した

キノコのように見えるそれは、日本なら

学校で習うだろう。

「これはキノコ雲と言って、自分達この国（日本）

に落とされた爆弾で発生した雲です」

次々と変わる映像に、オペレーター達は

最初は分からないといった表情だったが、

補足をするると険しい表情に変わる。

「皆さんに協力していただきたいのは

そういう（核の被害）為なんです！

どうか！地球の人間と協力して

いただけませんか?!お願いします!!」

男が床に伏し、土下座をした。

土下座なんて被害が起きないなら

何度だつてする。

「わかった。お姉さん達に任せなさい!」

ブレイズの声に他のオペレーター達が続く。

「とすればイエラグも危険だな。

資料はあるだろうか?力になるう」

「龍門（ロンメン）としても見過ごせ

ないわよ!ねえ!ホシグマ!」

「もちろんです。小官も手伝わさせて

いただきます」

男の瞳に涙が溢れている。

今日から皆で守っていくのだ。

二つの世界を!明日を!

話が終わり各自が食事を楽しむ。

「さつきは疑つてごめんね!」

まさかそんな物があるなんて思わなかったよ!」

「い、いえ。核をミサイルにするなんて

誰も思いませんから」

ブレイズと会話していた。

この人グイグイくるな。

「それでね。お酒も貰えるのかなく?」って

思うんだけど、イタタタ。

ちよつとケルシー先生痛いよ!」

「制限させてもらうが頂く予定だ。

飲みすぎないようにな」

「分かつてるよ!」

ブレイズの尻尾が左右にフリフリと

揺れている。それだけ嬉しそうだ。

見ているのに気づいたのか「触ってみる？」と聞いてくれた。

「おおーサラサラだ」

「もうくすぐったいよ／＼／＼」

テレテレしているが満更でもなさそう。

別の人の元へ向かった。

（アイスばかり食べてるけど大丈夫か？）

「ん？お前は」

紅い髪に角を生やした女性はスルトという名前らしい。

「アイス好きなんですか？」

「まあな」

ペロペロと舐めとっている。

ちよつと子供っぽい方だ。

「地球には他の味もありますから。

バニラ味や牛乳以外にも楽しんでいって

くださいね」

たしか何処かに沢山種類がある店が

珍百景で紹介されていたような気もする。

「ねえねえーギターはあるの！」

「音楽とヘッドホンはあるだろうか？」

「それなら音楽専用の部屋を作る予定なので揃えておきますよ」

「やった！」

ヴィグナさんとフロストリーフさんは

音楽仲間かー。いいなー。

「魚が沢山・・・全部捌いてみたい

ですが大丈夫でしょうか？」

「資格と知識がある人と一緒なら

構わないですよ」

ジエイが職業として気合いをいれたり。

ここからが本当の出発。

誰もが住める世界を維持し続けるために

今日も店は開店している。

ペンギン急便と楽しもう。

「店長。こんなお菓子は有るだろうか？」

「ポッキーですか？それなら、はい。」

カタログに載ってるのが基本的に
いつでも買えるやつです。

限定は販売が決まったらお知らせして
いますよ」

「こんなに！一個ずつ貰おう！」

「まいど！」

テキサスは店にやってきて、早々に
ポッキーに類似したお菓子があるかを
尋ねてきた。

ポッキーは江崎グリコや他の会社も作っている
細いスティック状のお菓子だ。

チョコ、塩、抹茶、ミント。更には
季節限定の果実を使った味付けがあり
大人気商品。

「トッポも要りますか？最後までチョコ
たっぷりですよ」

「貰おう」

テキサスはポッキー類が好きなようだ。

「じゃあこれはオマケです」

別味の二袋をオマケで付けた。

尻尾がブンブン、耳がピョコピョコして
嬉しさがマル分かりだ。

すぐに箱から出し、袋を破いて口に
啜える。

パクッ

「抹茶も悪くない」

「テキサスさんは極東に行ったことは

あるんですか？」

「ないな。彼処は今、お互いで争って

いるのは知っているが。

気になるならアカフユやマトイマルに聞くと

いい。教えてくれるはずだ」

そうですか。

「なあなあ！店長はん！これはなんやの！」

「どのアップルパイも美味しそう！」

我慢できなくなっちゃうよー！」

「アイドルが沢山いますね。

負けませんよー！」

別のメンバー達もたのしんでいるようだな。

テキサス編

「任務完了。撤収する」

「お疲れテキサス。今日も助かったよ。

今後とも期待しているよ」

任務を終え、ロドスに帰投し。報告書を

提出して、私室に急いだ。

地球のお菓子は在庫がもう1箱だけに

なってしまうていた。

「誰か食べたのか？」

いや、ワタシが1人で食べたんだ。

美味しくてつい、手を進めてしまっていた。

急いで買いに行かなくては。

テキサスはバックを肩から掛け、急いで

コンビニに向かった。

買い物かご一杯に商品を詰め、会計を

済ませる。通貨はもちろんテラのだ。

「週3で来てませんか？テキサスさん」

失礼な

「週5だ」

「それほほ毎日ですよね？」

ペンギン急便は荷物運びや護衛と色々している会社だ。

給料は高いが損害も大きい。

社員は少ないが精鋭といった感じである。今いないのはパイソンとモステイマだ。

パイソンはフェンツ運輸の社長の息子であるため、付き添っていたり

ペンギン急便で仕事をしていて、まだ来ていない。

モステイマは年単位で帰ってこない時もあるのですが、そもそも異世界の事は知らない。

もしかしたら調査してるのかもしれない。

「ちよつと！真面目にやりなさい！」

「えく？美味しいお菓子があんなら

いいよー」

監視役の誰かとじやれていたりして。

「そうだ！はい、これ！

なんでも収穫が少ない果実を使った限定品らしいですよ。どうしますか？」

買うに決まっている。

財布から金を出そうとした時

スカッ

使い果たしているの気がついた。

「買いすぎですよ」

エクシアかソラに借りるとしよう。

だが、その前に

ズカズカとお菓子の議論をしている

集団に近づき、テキサスが一言。

「TOPPOもいいぞ。最後までチョコ
たっぷりだ」

そんなことをいって走って二人を探しに
店を出ていった。

テキサスはお菓子と売り文句に毒された
ようだ。

エクシア編

「どれがいいかな？こつち？それとも

あつちがいい？」

「食べられなくなるやつから選んだ方が

いいんじゃないですか？それと近いです

エクシアさん」

「いいじゃん!?店長のせいで

テキサスに引っ張られて、アップルパイ

食べ損ねたんだよ!」

「いや、あれはテキサスさんの使いすぎ

でしょ?!お菓子にどれだけ使うんですか!」

「だってあんなに種類が増えて買わない方が

おかしいでしょ!!」

「・・・限度を考えてくださいね!」

テキサスがステック類を買い占めたから

発注しないと在庫がないんだよな。

こつちに優先的に卸してもらおうかな。

「まずはスタンダードので!それから

珍しいやつと稀少なやつと季節で限られてる

のをお願い!」

頼まれてから数時間後、出来上がったとの

報告を受けたのでエクシアに連絡した。

彼女は急いでやってきた。二人の人物を

連れて。

1人はニコニコ笑顔で、もう1人は
呆れている。

「まさか自分だけ美味しい物を食べる
つもりだったのかい？エクシア」

「はく。急にロドスに帰ると言い出した時は
呆れたけど、戻ってきて更に呆れたわ」
苦労されているようで

「そうなのよ！貴方は分かってくれるのね。
ドクターと一緒になつてからかつて
くるのよ！」

「あはははは」
本当に嫌いなら一緒にはいないだろう。
お互い仲良いんだろう。

フィアメツタとモステイマを加えた三人が
楽しく談笑しながら、アツプルパイを食べて
いるのを見させてもらった。

たまにあだ名か変な名前が連呼されていた。

「それは呼ばないでつて言ってるでしょ！」

「いいじゃないか。印象に残りやすいよ」

それは別の意味では？と思つたが、フィアメツタ
の前で言うのと更に怒りそうなので
口には出さない。

クロワツサン編

「うちこれがしたいわ」

クロワツサンが言っているのは露店商
つまり地球ではフリーマーケットのこと
だろう。

「品物はどうするんですか？」

「あつ！そうやった！そこまでは
考えてなかったわ！うくん、店長はん

「どうにかならへん？参加したいねん!!」

「そうですねー。集めて見ましようか」

「インターネットで要らなくなった物を

募集したところ、沢山の人から貰うことができた。中にはネックレス等の高価な物も

あつたが、持ってても仕方ないとの事なので引き取らせてもらった。

「沢山あるなー。売りがいがあるでー」

「これはー」

ダンボールから出し、売る物を探していく。

「これなんかまだ着れるやん！なんで

捨てるのや？もったいない」

「地球では物が溢れてますから。それに

欲しくなったら買う人がいるので、溜まって

いくんですよ」

「ならロドスの患者が着れるように

バイビークやオーキッドはんらと

相談して、新しく生まれ変わらせよか」

「売る物とりサイクルする物を別けていく

クロワツサン。彼女は商売だけではなく

人を気遣う考えもあるようだ。

製薬会社の一員なら当たり前か。

「楽しみや〜!!」

「・・・問題ないよな？」

当日

「スペシャルライブですー!」

「ソーラーちゃん!」

「何故こうなった!？」

「年寄りばかりのフリーマーケットを

開催した。年寄りなら話してしまっても

コスプレでなんとかできると思った。

「ありがとう〜!! チュッ♡」

おお〜!!

以外に盛り上がってるな。

「お疲れ様です。代役ご苦労様でした。

ソラさん」

「えへへ〜／＼／緊張したけどうまくいったよかったよ」

本来なら演歌歌手がくるはずだったの

だが、渋滞で遅れていたところに

ペンギン急便のメンバー（ソラ除く）が

推したのだ。

結果は以外にも大成功、お年寄り達も

満足してくれている。

「次はうちの番やな〜。もうけるでえ〜!」

おばちゃん! これなんかどないや!?

お得やで!!

おっちゃん! 奥さんにネットクレス買って

いかへん? たまにはプレゼントせな

あかんで!

話しかけ、商品を見せ、買いに持っていく。

一連の動作は慣れた手付きだ。

どんどん商品が売れていく。

「テキサスはん。それはこっちゃんやで!

エクシアはんは宣伝してきてな!!

ソラは接客おねがいや」

商売になると誰よりも頼もしい。それが

ペンギン急便のクロワツサンなのだ。

「ガツポリ儲けたで〜!」

帰りは満足な笑顔だった。

酒好きと屋台

マウンテン編

「前に買わせていただいたワイン

良かったですよ。まだ有りますか？

それから別にもう一本買わせてもらいましょう」

「マウンテンさんはすっかり虜ですね。

酒倉さんも喜んでましたよ」

「そうですか。あつ、この手紙を渡して

おいてください。テラのワインについて

書かれていますから、役に立ちますよ」

「なるほどわかりました」

現地の人からも情報収集は大事。

ホシグマとマウンテンはしっかりとした

感想をくれるのだが、ブレイズとパラスは

酔って感想を忘れる。リインは難しい言葉を

使うのでよくわからない。

マウンテンは貴重な情報源の1人だ。

「交流会の時に一緒に飲ましてもらい

ましたが、大変良い話を聞きました。

テラでも広める事ができればよいのですが。

そうもいかないでしょう」

貧富の差があり、買える人買えない人。

手に（入れられる、いれられない）が激しい。

もっと気軽に酒が飲めるように早く

ロドス以外にも、店をオープンしたいな。

「ロドス内で店の良さが分からない

人はいないでしょう。タダで酒が

飲めるわけですから。

支援物資だけで医療品や設備それに武具等に

注ぎ込めるお金が増えたと、アーミヤ

さんが言っていました」

それは嬉しいことだ。

「酒の事なら何時でも相談に乗りますよ！」

店長！」

「マウンテンさん！」

見た目はホワイトタイガーで怖いがいイイ人（元囚人）である。

店長とマウンテンは仲良くなった。

ホシグマ編

「店長どうですか？仕事終わりに

グイツとしませんか？」

「おっ！いいですね〜。

参加させてもらいます！」

これがいけなかった。安直に参加を
してしまったのだ。

彼女が酒豪かどうか、事前に聞くべき
だった。

それから

「むっ！」「あっ！」

知り合い（チエンとスワイヤー）も

一緒かどうかもな。

二人は普段の格好ではなく、着崩した
格好だった。普段は男に見せない格好
だった為、慌てている。

「あゝ、出直しましょうか？」

「これぐらい大丈夫なんだから！」

「そうだぞ！まったく勘違いだ！」

顔を真っ赤にしながらい言っても説得力は
ないのである。

取り敢えず持ってきた物を渡す。

急いで近くのスーパーから買ってきた
お惣菜だ。朝から晩まで社員の人達が
必死に働いて作った食べ物はいそいそ。

「地球のおつまみもですか。酒もこんなに
ありがたい。では、始めましょう」

カンパニー！

ジョッキにビールを注ぎ、ホシグマの
音頭に合わせてジョッキを当てあう。

てかグラスがジョッキつてヤバくないか？
今更である。

「ぶはー！ガブツ、んぐ。唐揚げに胡椒が

しつかりと揉み込まれます！

それにこれはチーズが付いていてまた
良いですね!!」

ホシグマが絶賛しているのは

唐揚げを油で揚げた後に胡椒をまぶして
揉み込んだ、唐揚げ（胡椒）。

チーズを上に乗せた唐揚げ（チーズ）だ。

「これは竹輪（ちくわ）かしら？（パクツ）

あら〜！美味しいじゃない！」

醤油もどうぞ

「ふふん！気がきくじゃない」

パクパクとスワイヤーが食べているのは
ちくわの穴に野菜を入れた、女性向けの
商品。女子でも飲み会したい方に向けて
作られた物で、自分でアレンジも可能だ。

野菜も摂れるから人気になったんだっか。

「テラでは見ない魚だな」

「あく、生態によってはいないやつ

ですかね？マグロは泳いでないと無理
だとか聞いたような」

油っこい物だけではダメだと思ひ魚の刺身も
買ってきた。テラでは滅多にいないのか？

「ふむ（パクツ）・・・以外といける
じゃないか」

「ちよつとチエン！ワタシにも寄越しなさい！」

「私も欲しいです」

「こら！自分のがあるだろう！」

ワチャワチャしてきたな。

自分は枝豆を茹でたおつまみをチビチビと
食べて三人を眺めていた。

チエン以外はある戦いの後、龍門に残って
仕事をしている。ただ、ロドスと契約して
オペレーターとなり、一緒に任務に出かける
時もあり。仲はまったく変わらない。

スワイヤーとチエンが口喧嘩して、それを
ホシグマが宥めたりするのがロドスでも
日常の一部になった。

離れていても変わらない友情がそこに
あるのだ。

「ちよつとー！聞いてる!？」

「キイテマスヨー」

「スーお嬢様はなー・・・」

二人が酔い始め、絡み酒になった。

何故自分だけにくるのか。

二人が挟んでくる度に二人のその・・・

立派なモノが当たってくる。

やめてくれないだろうか。

ホシグマはそんな現状をニヤニヤしながら
酒のつまみにしてるし。

助けてくれたっていいじゃないですか。

1時間後

「ようやく解放された」

途中から腕の骨がミシミシ軋んでいたけど、耐えきった。今は

ホシグマと一緒に部屋の片付けの真っ最中なんだ。

「いつもは私に被害がくるんですが。

どうやら、其方に集中したようですね」

ホシグマは二人を自分のベットに

寝かせて、片付けに参加してくれた。

スツキリしたところで再び飲みなのす

ホシグマ。

「地球のお酒も美味しいですね。

龍門に持って帰りたいですが交流がまだ

です。ウェイ長官が許してくださいるか

どうか、わかりませんか」

龍門のトップ、ウェイ・イエノウ。

たしかケルシーからチエンの親代わりを

していたと聞いたな。

その政策は龍門を近代都市で常に進化

し続けさせているとか。

「いずれは龍門にも行く機会がある

でしょう。その時はお願いします」

「その時は小官が担当かもしれませんが」

普段のホシグマなら私だけど小官と口に

する時は仕事か任務の時だけ。

ロドスの一員としては仲間でも、龍門は

まだということか。

龍門……実際にいくとどんな所

なんだろうか？しっかりと仕事は

できるだろうか？

龍門に訪れた日に、地球と龍門の未来は

加速する。

「あつ、もう飲まないんで」

「つれないですねー」

ブレイズ・パラス編

「店主よ。何故盃にお酒を注いで

くださらないのですか?」

「そうだよ!?!」

ブレイズとパラスの抗議にキツパリと

告げる。

「飲みすぎ」

「そんなあく!!」

「私はまだ五杯目だよ!」

「まだ序の口なのですが・・・」

「アルコール度数90のウオツカなら

それで十分ですよね!?!」

まったくこの二人はそうまでして

飲みたいのか。

呆れていると迎えがやってきた。

「ブレイズ早く寝て。明日は仕事

なんだから支障がでる」

「あんたもだ司祭。店主が困っている

だろうが」

グレイスロートとサルカズの傭兵が

やってきてくれた。では後はお願いしますね。

「任された」

はあくまったく、このふたりは。

それから数週間後。

「おっさけくおっさけく」

「この日がやってきました」

いや、単に歩き屋台でおでんと酒を

飲み食いするだけだから。

今日は皆（飲兵衛）と屋台で楽しむ為の集まり。

場所を変えて屋台へ。

「大将！大根ちようだい！」

アツアツでね！あと熱燗一本追加で！」

「あいよー！」

こんにやく！はんぺん！がんも！

この屋台は今日限定。営業してくれて

いるのは昔、歩き屋台を夫婦でしていた方達だ。

「いや〜探すのに苦労しましたよ」

「ありがとな！おかげで嫁さんとまた

屋台出来るなんてありがたいよ！」

「ふふふ、懐かしいね〜」

羨ましいくらい仲の良い夫婦さんだ。

「そつちがあついのもいいけど、お酒

おかわり！5本追加しといて！」

「なら私は10本欲しいですね」

「ワインも良いですが、おでんと日本酒も

最高ですね」

「マウンテン殿は初めてでしたね」

テラの人達と楽しむ屋台おでんは

とてもよかったよ。

他にもラーメンやそば、うどんなんかも

テラに広めていきたいな。

「パラス！それ私のお酒！」

「早い者勝ちですよ。ブレイズ」

ホシグマさんとマウンテンさんは

問題になる前に対処お願いします。

「わかりました」

パラス並びにブレイズは、後日たつぷりと

ケルシーから大量の説教をされるはめに。

花と野菜と畑

「どうぞパフューマーさん。約束して

いた花の種と園芸用の土です。

」ご確認ください」

「あら、ありがとうございます店長君。そろそろ

受け取りに行こうと思っていたのよ」

パフューマーに頼まれていた種と土を渡した。

「確かに受け取ったわ」

「ではこれで失礼します」

「よかったら寄っていかない？」

「楽しめるかは分からないけど」

特に用はないし、店のシャッターは

閉めてきたから問題はなし。

誘いに甘えるのでしょうか。

花や植物が咲き誇り。自然の中になると

錯覚させる程の部屋の中には、啞然と

してしまう。

パフューマーが最初は一人で始めたんだから

すごいものだ。

地球でも特化してやり続けている人は

何人もいるがパフューマーのはそれと

同じか、それ以上なんだ。

素人としての考えだけど。

「ふふ、ありがとう。ポデンコちゃん達も

今は手伝ってくれているから、昔よりは

平気よ。皆にも評判が良くなったし」

「……パフューマーさんは地球で

仕事する気はあつたりしますか？」

支援にお金は含まれない。それは

世界が違い、通貨も違うから。しかし

自分が欲しい物がいつでも貰えるわけではない。

あくまでも戦争回避の為の支援。

自由に何でも貰えるという訳ではない。

だから、コンビニで売っている商品はお金を貰っている。

地球向けに何かをしてくれれば対価として

支払ってくれるだろう。

テラに住む生物の講義とか実際に戦う時の

対処法、自分が受けている歴史の授業とか

色々ある。武器の提供は流石にマズイので

ムリ。

ムリ。

「花は応用が出来ますし、地球でも同じように

庭園を作って入場料を取っても大丈夫ですよ」

「う〜ん。魅力的なお誘いだけど

こつち（ロドス）があるから、そつち（地球）は

趣味の範囲でやらせてもらおうかしら」

「なるほど了解です」

パフューマー視点

店長君改め地球では望君と一緒に地球で

花を育てる事になったわ。趣味の範囲で

だけど。

「こんな感じですかね」

プランターに土を入れ、指の先で穴を

作り、種を入れたら、土を被せる。

後は何を育てているか分かるようにして

出来上がりよ。

「二人だけで育てるのってドキドキするわね」

ドキッ（心の音）

「へっ！そ、そそ、そうですね」

(ビックリしたー！)

「ふふ♪」

ロドスで初めて作った時もこんな感じだったかしら。あの時は私も知識がなくて、困っていたわね。

機械の動かし方も分からず。でも、今ではポデンコちゃんや他の皆が助けてくれる。

「一緒に頑張りますよ。てんちよーくん」

「そうですね！」

パフューマーと望の花育てが始まった。

二人で朝の水やり

これぐらいですかね？

「うん。そんな感じよ」

朝、二人でプランターに小さなジョウロで水をやる。やりすぎはダメなので私が合図を出して、止める。

後は日光が当たりやすい場所に置いたり。

観察の為にビデオカメラを設置したりしたわ。

子供達に授業で使えるかもしれないわね。

芽が出たら、虫が食べないように

定期的に確認をする。

花が咲くのが楽しみだわ。

バグパイプ編

「ラナさんだけじゃないべー！うちも

畑仕事やりたい！」

押し掛けてきたのはバグパイプ。

ヴィクトリア軍人でロドスでは戦闘もこなすオペレーターの人だ。

彼女は日常では畑仕事をしており、友好がロドスの中で多い人、上位である。

何故そんな彼女が来たかというところ

パフューマーもというラナが、地球で花を

育て始めたと聞いたから。

自分も畑仕事をやりたく、こうなったわけ

なんですよね。

頬に手を当て困った顔のパフューマーさんも

可憐だな。

「まあ、やりたいなら構いませんけど。

一からになりますよ?」

「だいじょうぶたべ!うちにまかせて!」

ふあん・・・かな。

なんやかんや始めてみることに。

畑仕事を辞めた所から土を譲っていただき

それを川が流れている所から、離れていて

水を汲みやすい近くに、土を撒いて簡易に

作った。

「家庭菜園ぐらいでいきましよう」

ザクザクとクワで耕していく。たまに

ミミズや虫が土から出てくる。

バグパイプさんは平気そうだ。

まだ5月なので少し暑いくらい。しかし

動くとき汗をかくわけで、シャツが透けて

しまうこともあるから注意だ。それと

水分補給はしっかりと。

「機械を使わずにやるのって楽しいね。

隊長がいたら一緒にしたいな」

バグパイプの隊の隊長さんとはある行動中に

別れてしまい。それ以来、ずっと探している

と聞いた。

諦めず探し続けているのは隊員としての信頼からかどうかはわからない。だからバグパイプさん。無防備にシャツで汗を拭くのはやめてほしい。女性を主張する二つの立派な物が揺れて気まづいんだ。

次の日。

小さな子が一緒にやって来た。

「グラニだよ！よろしくー！」

活発系少女といった感じの子。

バグパイプはヴィーブルの種族でグラニは克蘭タっていう馬の種族みたい。

耳がピコピコしてて触りたくなってしまうな。

「ガンガンいくべー！」

おおー!!

三人でザックザクと耕していく。

テラの二人は体力があつて余裕で、自分はちよつと辛い程度。

ドーベルマンとの訓練の成果を実感できる。

耕し終えたら、肥料作りだ。

野菜のいらぬ部分と土を混ぜる。

専用の容器や場所でするのがいいだろう。

小学生の時に体験したが臭い。しかし肥料としては薬品とか使わないからいいんだろう。

今はやっている人は農家でも少ないけど。

「量を作るんだったらトマトかピーマン

ですかね？」

「ピーマンはキアーベさんが嫌がりそうだね」

「あく嫌いな方がいるんですね」

肉詰めとか肉と一緒に炒めた物なら

いけるのか？試してみよう。

「うめえー！これならいくらでも

食べられるぜー！」

「まったく。最初は目を瞑っていたくせに食べれたら、これだ」

「まあ、良いじゃないですか。キアーベがピーマン食べるようになったんですし。

結果良ければ全て良しでしたっけ？」

「味の素製品に感謝ですね」

ガツガツと青椒肉絲を食べるキアーベを

ブローカーとアオスタ、自分の三人が見てる。

最初、ピーマン料理と言ったら逃げたので

ブローカーさんとアオスタさんに追いかけて捕まえてもらった。

マッターホルンさんとグムちゃんにタレと

肉とピーマンを渡して、箱の裏に書いてある

手順に沿って作ってもらった。

「食べすぎると、食事が偏つてると

医療部に怒られるので1週間に一回で

十分だと思えます」

油たっぷりを使っているから。

「他にも回鍋肉とか別のがあるので

良かったら買いに来てくださいね」

店の商品と宣伝も兼ねておこう。

バグパイプ視点

望が用意してくれた畑で野菜を作ることにな

ったよ。まだ土壌の改良をするけど

これからロドスの皆に、いっぱい野菜を

届けていくんだべ！

「わあ〜！キアーベさん。それは開けちゃダメー!!」

「くっせえ！なんだこれは！」

「キアーベさんそれは肥料になるやつだよ。

自然に分解されるのを待ってるんだ」

キアーベが蓋を開けてしまつて臭いが

こつちまでやってきたよ。うう、臭い。

でも乾燥して、分解され、土に栄養がいつて。

それを野菜の根が吸収すれば、もつと美味しい

野菜ができるんだよ。

「卵の殻にも栄養があるらしいので、今日は

これを皆で撒くんだよね？うち楽しみだよ」

「私も早くしたい！」

「では6人でやっていきましょう」

「おうよ！俺様達に任しとけ！」

キアーベ、ブローカー、アオスタの三人が

加わり賑やかになった畑で、楽しく卵の殻を

畑全体に撒いた。この努力が野菜を育て

ウマ味を更に旨くする1つとなる。

「山の中で天然に濾過された水を撒きますよ〜」

井戸から汲み上げた水をジョウロに入れ

キアーベ、ブローカー、バグパイプの

三人が撒いていく。

地球で育った野菜がいつの日か、テラで苦しむ

患者達に行き渡るようにと願いを込めて

神と人と狐（ヴァルポ）

「そこに座ってくれ」

現在、外交官の偉いさんに呼ばれて
部屋の一室でソファ―に座り向かい合わせ
でいる状況。

何か失敗をしたでもなく。急に呼び出され
ただけど、何なんだろうか？

（やはり似ている）

外交官は覚悟を決めた表情で質問した。

「ワシの娘の子かね。君は？」

「………へ？」

どうやら外交官の娘さん（成人済み）は
結婚を反対した時に出て行ってしまったらしい。

それ以来、連絡も帰ってくることもなく
27年が過ぎたと。

夫の方は了承がもらえれば紹介する予定
だったらしく。1度も会っていない。

「たしかに母の方の両親は会った事も

話も聞いていませんが……。

本当に貴方が僕の叔父なんですか？」

「すまんが確証はない。ただ似ていると

いうだけなんだが……何故か

気になるのだ」

「え、え」と

「こちらが写真になります」

二人いる秘書のうち、男性の方が写真を
手渡してくれた。

端がボロボロだがなんとか写っている部分は
無事だった。

次の日。

とある病院内を望（のぞむ）が歩いていた。
目的は母親が入院しているために
会いに来たのだ。

「えーつと、172号室、172号室つと」

聞いた病室の番号を口に出しながら

部屋を探す。後ろを祖父（仮）が着いてきてる。
もちろん秘書の方も一緒に。

大丈夫なんだろうか？

不安がありながらも目的の場所へ。

「此処か」

コンコン（ノックする音）

「はぁーい。どうぞ〜」

スーツとスライド式のドアを開けると
ベットにいる母がいた。

1人用の個室で丁度、父も来ていた。

「あらっ！望く会いたかったわ〜」

ギョツ（抱きつかれる）

「元気にしてたかい？」

「うん。容態はどうなの？」

「問題ありません。えっへん！」

「ただベット生活と車椅子生活になるから

暫くは安静につて、先生が言つてたからね。

望の負担になつてるけど大丈夫かい？」

「う、うん。大丈夫だよ。

仕事もちゃんとやつているし。あつ！

それでなんだけど・・・その・・・」

言おうかどうか迷つてしまった。

不安にさせたくないし。でも、部屋の外で

まつている人達に悪いかな。

息子は聞く事にした。

何故そうまでして付き合いたかったのか。
祖父の事を何故だまっているのか。
息子として知っておきたい。

「入ってください」

その言葉に親は？マークを浮かべた。

しかし入ってきた人物を見て、母親は目を大きくして驚いていた。

「まったく、なにやっとなるんじや。お前は」

「なんで此処にいるのよ。まさか望を

調べて・・・お父さん！」

「ここだと迷惑になるから屋上へいくぞ」

（まったく、入院ぐらい連絡せんか。

馬鹿娘が）

母は車椅子に乗りそれを父が押す。

部屋から出て、エレベーターがある中央までいき。そこから屋上へ。

屋上に着いて祖父はベンチに座った。

対面のベンチに自分達も座る。

母は車椅子に座ったまま。

「知り合っただのは仕事じゃよ。機密で

何をやっとなるかは言えんが。孫はそこで重要なポジションにおる。

全てはお前の手術費の為にな」

「どうゆうことかしら？」

「えっと〜（目をそらす）」

（じいちゃん助けて！会わせてあげたよね！）

祖父に助け船を求めた。

サツ（顔をそらす）

（ちよっとー!!）

「まさか・・・あれ関係なの？」

母の表情が曇る。小さい頃にある事に

巻き込まれて、意識不明になった事がある。
それだと思っただろう。

「違う……とも言いきれない」

キツ（祖父を睨む母）

「ワシには分からのだが、何かあったのか？

まさか！その頃から既に！」

「二人とも違う！違うから！」

病院に防音の個室を貸してもらい、そこで
話すこととなった。秘書さんが無線で連絡

したら、数人の黒服の人達がやってきて

扉前の左右に立ってくれた。中も盗聴機がないか

調べている。

「問題ありません」

「うむ、ご苦労。お前は一緒に聞いてくれ。

家庭の問題だが、やむおえん」

「承知しました」

秘書の人は祖父の後ろにピタリと立った。

ドラマとかでやってる感じだ。

「えっと、驚かないでね？」

目を閉じ、心の中で念じる。

すると望の髪の色が黒から白へ

変わっていく。

「……こういう事だ」

口調も優しめではなく強めな口調に
なっている。

「な、なんじやそれは！まさかアーツでは

ないじやろうな!!」

「ちげえーよ。それだったら最初に

言ってるだろうが」

「むむむ」

「はあ」

「アーツ？神様の力の事？」

「違う。神様の力は地球なので、アーツは

テラっていう異世界の力の名称。

そこで働いてんだよ俺」

小さい頃から視えていた霊といわれる存在。

そののせいで自殺しそうになったり

暴れたり、殺しそうになった事もあった。

お札を貼っても効かず、助けてくれたのは

消えかけの神様だった。

その神様のの力がゲームらしく言うと

霊に特効を持っていた。

元々人間が持っていた力。清らかな力が

祓う力に変わり、それが更に進化したのが

神性を備えた神祓。

神が自分の中に入っただけなんだが

おかげで今を生きれている。

「口調や性格にまで影響が出ておるのか」

「力を抑えていたらな」

だから今は抑えていない状態。

力が漏れて付近の悪霊や悪い霊は

現界からは居なくなるだろうな。

あくまで邪を祓う力だし。

「異世界のテラ……本当に

大丈夫なのね？もうあんな事はごめん

なんだからね！」

「分かってるよ。向こうでこの力使ったら

大騒ぎじゃすまねえし」

未知の病気を治せる。それだけでどれだけ

ヤバイか、わかったもんじゃない。

「孫にそんな力が……。なんで

連絡してこんのじゃ!？」

「五月蠅いわね！お父さんが決めた
結婚相手なんかごめんよ！」

「見た目だけじゃない！」

「なにを！政治には付き合いつてもんが
だな！仕方ない時もあるんだぞ！」

ガララツ（扉が開く）

「この！」

「いい加減にしなさい!!」

入ってきた女性の一喝で止まった。てか
誰なんだこの人は。

「夫と孫の前で喧嘩してるんじゃないよ！」

「まったく！アンタもあんただよ！」

「ろくに連絡も寄越さないで、何やってんだい！」

「説教だよ！」

それから父と自分の前で説教が始まった。

「反論も許されず、ただ叱られるだけ。」

「つらそう」

女性は祖母とのこと。一緒に入ってきた

スーツの女性の秘書さんが教えてくれた。

（男女で二人いたんだった）

祖母を迎えにいらしたらしい。

「会うのは初めましてだね。アタシは

娘の母の幹（みき）だよ。よろしくね」

「神納（かんの）です。こちらこそ初めまして」

「望（のぞむ）です」

母は葉果（ようか）で祖父は戦（せん）だ。

家族皆で色々と話し合った。

次の日、車で祖父母宅に向かっている。

倉の中や物が汚くなってきたから掃除するのを
手伝ってほしいと言われた。

親が迷惑をかけたのもあるので手伝う事にした。
今風の家ではなく、古民家風な家に到着した。
周りを掘で囲い真ん中に家がある。端っこに
倉が二つあった。

「どっちの倉なの？」

「両方じゃよ。ふたつ共ワシらの倉で

先祖の物が納めてある。男の好きな刀や鎧が
あるぞー。ばあさんのは倉には巫女の袴や
札があつたのう」

「古い家系なんだね」

「うむ。戦争で爆弾が落ちた時はダメかと
思ったが、周りの木だけで済んだのは
助かったわい。先祖の霊が助けてくれたやも
しれんな」

「へー！すごいね！それ！」

まあ、ゲームみたいな世界が実際にあつた
わけだし、なかつたとは言えないな。

「毎回部下達と総出でやっとする。

挨拶はしつかりとな」

既に数十人が倉の前に集まっていた。

そこに自分も混ざる。

「君が戦さんのお孫さんか。よろしくー！」

「何歳？」

「35歳です」

「あら、まだ若いのね」

「若いっていいな」

自分よりも歳がいつてる人達ばかりで
あれだ、関わりづらい。

優しく指示してくれるので従って物を
運び出していく。

刀に鎧に……これは巻物。それから

手裏剣なんかも出てきたぞ！うへ〜！槍もあるのか。こっちは弓と矢がある！

資料館にいるみたいで楽しかった。

祖母の倉には巫女さんが使う衣装、道具があつた。お札の文字なんか何書いてあるかまったく分かんなかったよ。

今日は祖父母の家で寝泊まり。

商品は事前に渡してあるので、なにもなければロドスの方は問題ないはず。

「神様に会ったねえ。アタシらには

何とも言えんねえ」

「先祖が神隠しにあつたと文献には書いて

あつたが、幹の先祖の遺伝か？ううむ

世界は不明な事だらけじゃ」

霊が視えるのは祖母の先祖の影響？とすると

祖父の先祖の影響も、もしかしたらあつたり？

「仕えていた者が書き残しておるんだが

一切語らんかったらしい。時折、狐の鳴き声を聴いたらしいが動物がおる土地ではなく。

町の中心だつたらしいからの〜」

今日はもう寝ることに。

夜

憎い

深夜、寝ていると頭の中に声が響く。

誰も近くには住んでおらず。また祖父母以外はいないはずの場所。成仏できない

霊なのだろうか？

我を主と離れた者どもが憎いぞ！

声は倉の方からだ。霊感がそう感じている。

着替えて靴を履きそつと音をださないよう

玄関から外へ。

倉は鍵を掛けてはいない。
倉の下から声は響いている。
もしかしたら何かカラクリがあるかも。
そう思つて携帯のライトで中を照らす。
部屋の一部に手が触れると、床がスライドして
地下への階段が姿を見せた。
ゆつくりと降りていく。
壁は石を積み上げ出来ていた。城の
下部分みたいな作りだ。それを歩き続けた
先に広い空間があり、真ん中に水晶玉が
置かれていた。

「原因はあの水晶玉か」

黒い靄が水晶から発生している。
なら！やることは1つ！

黒い靄が狐の形になって襲つてきたが
無意味。神性と浄化の力が悪の力を弾く。
力の本能である祓う力が自動で悪意ある
力を祓い退けた。

両手を水晶に近づけ念じる。この力は悪いモノを
浄化するだけで、消しているわけではない。
だから悪意があればまだ元に戻るだけだ。

ぐおおおおー!!!

黒が取り払われそこにいたのは……………。

帰る時刻

朝食を済ませ、出した物を倉に戻した。

「仕事では気をつけるんだよー」

「わかつてるって。もう」

祖母に言われながら車で祖父母宅を後にした。
ついでというか……刀と札は持つて
帰つてる。

うむ！これでお主も戦えるのじゃ！

(いや、戦いはごめんだぞ。あと

水晶玉から出てくんな。騒がしい)

水晶玉を袋の大きいのに入れ

持ち帰っていた。成仏はしないようだ。

しかもこれ、テラの住人と古いアーツユニット

らしいんだが、今は壊れているみたいで

使えない。依り代に憑いているだけ。

先祖は一体何者なんだ？

キララとマリオのRPG（冒険）

赤い帽子にトレードマークのM があり、赤いシャツ、青いオーバーオール（ズボン型つなぎ）を着た口髭を生やしたマリオが敵と対峙していた。

敵の名はカジオー、武器（部下）を作りだし（マリオ）ワールドを支配しようと企む親玉である。

「スターピースを渡すんだ!!」

「貴様のスターをいただいて、ワシがこの世界を武器だけの世界にしてやるわ!」

マリオとカジオーの戦いは工場が壊れ、地下でも続き、そして

「グオオオオオオ!」

マリオの決着で終るはずだった。

沈みゆく意識の中カジオーは願った。

（我が負けるはずがない!）

この願いを迷惑な存在が叶えてしまった。

画面の外では

「お〜い、そろそろ終わらないと医療部に

怒られんぞ〜」

店長が部屋に集まったメンバーに注意する。

テレビ（地球産）にはゲームのケーブルが繋がっている。

「あと少してエンディングが終るから!」

その時! 不思議なことが起きた!

画面が光だし部屋にいたメンバーはテレビに吸い込んでしまった。

そして一時的にテラと地球の時間は止まった。

【マリオとキララ】

気がつくくと城の中にいた。見覚えがある。

「もしかしてクツパ城？」

疑問を答えてくれる人はいない。

しかし、キララがいる場所は間違いなくテレビ画面でみたクツパ城だ。

皆が光吸い込まれ、気がついたら此処にいた。

「他の人も探さない」と

キララは赤い扉を開き奥へ。

次の部屋にはマリオの敵キャラでお馴染みの
ノコノコが倒されていた。

「うへえ〜」

驚愕しながらも部屋をまた進む。

最終的にたどり着いた部屋ではマリオとクツパが
言い争いをしていた。

「クツパー！どうしてわからないんだ!!」

俺達はカジオーを倒すために協力しただろ!?

何故覚えていない?!

「貴様と我輩が協力だど?ふざけるな!

我輩の目的は貴様を倒してピーチ姫を我が物と
することだ!」

シャンデリア上で続く争い、それは戦闘に
変わろうとしていた。

(本物のマリオとクツパがいる!!)

目を輝かせ、キララはらやり取りをみていた。

しかし、それに横やりをいれる者が一人。

最初から貴様らを始末しておけばよかったのだ。
四人の頭に声が響いた。

前と同じようにマリオ、クツパ、ピーチが
飛ばされた。

そしてキララもまた

「うあ〜ん！」

空高く飛ばされる。

後は戦いのルールを変えるだけだ。

黒幕によりスーパーマリオRPGの世界はこうして歪んだ存在（シナリオ）に変えられた。

その頃、マリオとキララは空中を落下していた。

「くそ〜！」

「落ちるー!!」

マリオはキララを掴み、自分の自宅に落ちた。

「助かりました」

「ああ、俺はマリオ。君は？」

「キララです、極東出身のイーギルです」

極東？イーギル？

「聞いた事がないが、いや、君の姿もまるで

この世界のキャラじゃないな」

「え〜っと」

キララはこの世界に来るまでの事を説明した。

「つまり画面の外から来たってことなのか？」

「そうなります」

「君の他にも来ているのか」

「はい」

自分がいるなら部屋にいた皆もいるだろう。

でもこの世界を一人でみて周るには寂しい。

「なら俺も一緒に探そう」

こうしてキララとマリオの冒険（RPG）が

始まった。

まず二人がきたのはマツシユロード。

「敵は俺に任せろー！」

この世界でアーツは使えない。だからキララは戦闘に参加できない。

「ぐっ！」

クリボーにさえ苦戦を強いられるマリオ。さつきまでとは様子が違う。

(なんでえ!?)

黒幕が戦闘システムを変えたのだ。

それを知ることが今はできない。

キララ咄嗟に前に出た。戦いを経験した自分なら多少は耐えられる。

「ばか！無茶だ！」

マリオが駆け出す。しかしクリボーもまた頭突きの体勢に入った。

マリオとキララ、二人を光りが包む。

輝きがなくなるとそこにいたのは

「私(と俺)が相手だ!!」

マリオの格好をしたキララがそこにいた。

帽子のイニシヤルはMからKに変わっている。

「やあ！」

頭突きを繰り返したクリボーにキララのパンチがヒットする。クリボーは地面を転がる。

(私の力が役立ったようですね)

マウンテンが今は一緒にいる。

クリボーを全て倒した。

(どうしてマウンテンさんが私の中に?)

(それは分かりませんが声が聞こえました)

暗闇の中に光りが射し込むと同時にです)

(あんたがキララの知り合いなのか?)

で、でかいな)

マリオは見上げる形でマウンテンに声を掛けた。

(ゲームのキャラに会うとは思議な体験で

すね。マウンテンです、よろしくお願いします)

(こちらこそ)

お互い握手を交わした。

新たな仲間を加え、マツシユロードから

キノコ城への道を敵を倒しながら進んでいく。

最後に立ちほだかるはハンマーブロス。

ハンマーを持ち、片手にはキノピオが捕まっている。

「なんだあ？お前もここを通りたいのか？」

ならコイン百枚用意しな！」

横暴な要求にキララ達は

「コインも払わないし、キノピオも助ける！」

いざ！戦闘開始！

振るわれるハンマーを避け、ブロスにパンチを当てていく。

ドガツ！バキツ！ドゴツ！

ブロスはキララのパンチに膝をつき倒れた。

キノピオに駆け寄ろうとするキララ

ブン！

しかし横の茂みからハンマーが投げられ、当たってしまふ。あまりに強力な威力に足に力が

入らない。

もう一体のブロスが現れた！

しかも担がれているのは

「マリア（ブレミシヤイン）さん！」

だった。

意識がないのか、返事が返ってこない。

加えてブロスは投げたハンマーを回収して

こちらに近づく。まさにピンチ！

「この女は空から落ちてきたのさ。それを俺様が拾ったわけだ、つまり俺様の所有物だ」

なんてゲスなやつ。

しかし助ける事ができない。

力を望んだ。

理不尽な力に勝つための力を！

それが奇跡を起こす！

マリアが光となり、キララに吸収される。

さつきまで動けなかった足に克蘭タの脚力が加わった。

「死ねえ!!」

シュツ！

足に素早さ（克蘭タ）が宿った。

（キララ！今なら俺の得意なアレができる！）

マリオの声に応えるべく、足に力を入れる。

（私のパワーも貸しましょう！）

皆で必殺の技を放て！キララ！

マウンテンのパワーと克蘭タの脚力で高く

ジャンプしたキララはそのままブロス目掛けて

キックを繰り出す。

スーパーマリオRPGでマリオが最初から本来は

覚えている技であり、今はキララ技。

キックである!!

「おごお！」

キックが顔にHITした。ブロスは後ろに倒れる。

キララ達の勝利だ。

「勝ったあ〜」

キララもまた後ろに倒れこんだ。

1面ボス撃破

キノピオと一緒にキノコ城がある町に到着。

キララ達はさすがに休むことにした。

宿で一人分の部屋をとり、改めて状況を整理する。

「まず俺達がカジオーを倒したのは間違いない

はずだ。だか、まるで時が戻ったようにやり直し
になっている」

「私達もゲームクリアをしていたので
状況はほぼ同じですね」

つまり

「私達がしていたゲームとマリオさん達の

この世界は関係がある？」

ということ。

マリオ達の最後とキララ達の最後が一緒だから
偶然の一致ではなさそう。

マリアも起きて話に加わっている。

「記憶どおりなら、この後にマロが仲間になる
はずだな」

マロとはマシユマロ王国の王子でカエル仙人に
育てられ地上で育ったマリオの仲間の一人。

「たしかキノコ大臣と話をした後でしたね」

本来ならキノコ大臣に話をしに行くべきなんだ
ろうが、記憶どおりにいかない以上、注意して
進むべきだろう。

「マリオさんの技をキララが使えるのはなんで
だろ？一人が何かを担当しないといけないの
かなあ〜？」

マリオが技、マウンテンが力、マリアが足。

あの部屋にはもつといたはず。

「俺達のようにマロ達と一緒にいるかもしれ
ねえ。なら、どのみち先に進むべきだろ」

世界を、スターを、仲間を、探す大冒険が
これからも続く。

皆が部屋で寝ている中、キララは

「私にもそれ貸して〜！」

一階ロビーの奥にいるゲームをしているキノピオ

にゲーム機を貸してもらえようねだっていた。

イエラグ編

イエラグに出発 開店準備

「店長、少しいいだろうか」

シルバーアツシユが店に訪れた。

「どうやら話があるらしく、ドクターの執務室で話し合いをすることに。」

「相談なのだがイエラグに店を構えないか？」

「薬の商品が多めだと嬉しいのだが……。」

「イエラグは雪国だ、それも山の中にある。」

「常に提供できる方法があるならそれが一番」

「なのだが、私の家以外はそうもいかなくてな」

「ドクターに視線を送る。」

「確かに我々ロドスなら他の二家も院も反対はしないだろうけど、何故彼なんだ？」

「薬ならロドスの方が良いと思うが」

「既にロドスとは協定を結んでいる。」

「他の二家からしたら入り込む余地があっても」

「差があるから不満が出るだろう。」

「店長ならロドスで店を構えてるだけだから」

「抱え込もうとする。」

「あくまで、イエラグで薬を販売し、尚且つ」

「スタートが一緒でなければいけない」

「それで自分か、責任重大じゃねえかよ。」

「それには準備がいる。」

「すぐには言わない、だが考えてほしい。」

「ようやくイエラグは変わり始めたのだ」

「テラの雪国とは、いずれ関係を持ちたいと」

「他国からも打診されている案件。」

「チャンスではあるが、リスクもある。」

「報告を上げてからの返事待ちになるかな」

個人で動くわけにはいかないのはこういう時に辛いもんだ。

すぐに各首脳宛に報告を出した。

それから数カ月してイエラグへの出店と

内情や情報収集の目的で許可された。

「メランサよろしく」

「はう！が、頑張ります！」

「カーデイは言う必要はないな」

「ええ〜！なんでー!!」

「元氣さえあれば十分だからな」

他に期待してる部分もあるけど。

「アドナキエルとスチュワード、アンセル達も

よろしくな」

「カーデイ、店長さんに迷惑はかけない

ようにね」

「任せてください、期待には応えてみせます」

「カーデイちゃんは見えますから、店長さんは

仕事に集中しててください」

とりあえずはA4予備隊メンバーと一緒に

イエラグに現地入りをする。

先にsharpとオーロラが扉（ゲート）を持って

入ってる。

イエラグで合流する予定だ。

「しゅっぱ〜っ！」

おしんこ〜（某五才児風）。

鉄道に揺られながら四人席と隣の四人席に

三々で別れて座っている。

隣がメランサ、カーデイ、アンセル。

こつちが俺、スチュワード、アドナキエル。

え？アンセルは男だからこつちだつて？

いや、初対面だと女子にみえるからあつちで

大丈夫だ（キリッ）

「車内販売はしてないのか？イエラグだけじゃなくて他のお土産物買えるからあれは便利なんだけどな」

車内販売。

文字通り車内でワゴンに飲食物を載せて販売する方法だ。

忘れた時とかに便利、景色を観ながら

食べるのは最高なんだが、まだないようだ。

こんな事なら持つてきたらよかつた。

「お菓子食べる人々」

「はいー」

真つ先に手を上げたカーディ。

「クツキー（白い恋人）だから食べカスに

注意だぞカーディ。他のみんなもほら、遠慮なく

食べてくれ」

皆が口に運ぶ。

「サクサクで食べやすいですね」

「長年売られている商品だからな。

改良やら手が加えられて常に進化して

いるのさ。イエラグ用に別のやつを作つて

もらおうかと思つているんだ」

「それなら狼の形はどうでしょう？

もしくは猫とか」

「雪国の動物クツキーか・・・いいかも」

色は白色のホワイトチョコクツキーとか。

談笑しながら過ごしているといつの間にか

イエラグ近くまでやつて来ていた。

車内にアナウンスが流れる。

降りる準備をして着いたら即降りる。

sharpとオーロラが待っていた。

「二人ともお疲れ様！」

「待っていたぞ」

「建物（店）周辺や中は調べ終わってるから

大丈夫だよ。安心してね」

「助かります」

では向かいましょう。

店は地球のコンビニ（平均）位の大きさで

木で建てられていた。しかし、長年の経験と

技術が木で建てられていても安心感を

感じさせる。

（資料通りに建ててくれたわけか）

シルバーアッシュにはコンビニとドラッグストア

の資料を事前に渡している。それを彼が建て

偶々自分（店主）が買ったようにしてある。

「例の物（扉）は自室の中だ（ボソツ）」

「了解」

シルバーアッシュ家の領内に建てられている

から徒歩以外の移動手段がほしいな

自室にある扉（ゲート）を開く。

無事に地球へと繋がっているようだ。

空中にある微量の源石がエネルギーになって

いるようだ。

これで地球と繋がった。

「カーデイちよつときて」

「はくいー！」

カーデイを呼ぶ。

「ソリとこっちは引いてもらうための狼達

なんだが、世話を頼むな。」

移動手段が徒歩だけだと間に合わない時があるかもしれないし、最悪はスノーモービルを使うけどなるべくは使いたくないからさ。練習と躰はちゃんとしてな」

「いいの!?!わ〜い!」

またソリを使うなんて思わなかったよ!」

カーデイは雪ソリの巡回隊としての経験があるために選ばせてもらった。

他の隊員はカーデイの対応をするためでもあるけど……。

イエラグの経験で自分にできる事を知ってほしいのも理由。

「わ〜!僕は仲間じゃないよ〜」

助けててんちようさ〜ん」

ペロペロと狼達に舐められてるカーデイを助けつつ、地球からの道具を運び入れる。

商品はまだ置かないイエラグでどんな病気があるかも分からないから、調べてから

使用頻度が多そうな物を棚にセットする。

「カーデイはそのまま、アンセルは着いてきてくれて、それとsharpとオーロラも。

残りは建物をよろしく」

まずは他家の領主に挨拶しなくては。

「ペイルロツシユ家当主アークトスだ、それと部下のグロとヴァレスだ。

わざわざ挨拶に来るとはいい心がけだ。

店を構えにきたんだったか」

「はい、こちらはお近づきのしるしに

お酒をお持ちしました。アルコール度数

90のウォッカになります、どうぞ。

それと他の部下の方にもビールを持ってきました

ので配ってあげてください」
ウオツカ3本とビール24本入りを三箱
渡した。

「うむ」

「それでお願ひがありましたして、領地内の家々を
訪問させていただく事は大丈夫でしょうか？
薬を売るにしても症状が出てからでは遅くなり
手遅れになってしまいます。」

許可を頂けるのであれば、ありがたいのですが」

「ヴァレス、案内をしてやってくれ」

「はい」

アークトスが部下のヴァレスに命じて案内
させた。

ヴァレスが着いてくることになった。
家々を訪問して歩く。

「すみません、最近病気になった事は
ありますか？いえ、鉋石病ではなく風邪や
身体の具合が悪くなったりなどは。」

「風邪にはなっていないが腕が腫れたことは
あつたな」

「手足がよく冷えるんだが病気なのか？」
イエラグの人々は病気に対して疎い。

最悪なら亡くなってもおかしくないんだがな。
ヴァレスは話を聞いている時は険しい表情
をしている。

「貴方は今のイエラグをどう思いますか？」
質問された。

「悪いこともあれば、良いこともあると
言ったところですね。」

情報を規制されているから最低限のことしか
しない。それを集中しやすいと取るか

考えさせないと取るかは見方次第でしょう」

「そうですか」

「逆にヴァレスさんはどうです?」

え?

いきなり返されたヴァレスは困惑した。

急に話を振られ、答えを求められている。

「聞くということは何か答えを探しているん

でしよ?」

「そ、それは……」

「いつかは聞かせてくださいね」

それ以上踏み込んでくる事はなく。

会話も止めずに接してくる店主に、本当は

真実を交えて話したかったが、話すことなく

ブラウンテイル家に向かった彼と別れた。

「良かったんですか?」

ん?

「彼女話したそうにしてみましたよ」

アンセルの言葉に

「迷ってる間に出した答えなんて意味は

ないのさ。本当にしたい事をしっかりと伝えて

くれないとこっちも助けてやれないよ。

彼女、今は別れ道で止まっているからな」

俺はそう言った。

心の中でアンセルは

(そんなんだからロドスの女性達や他国の

女子に好意をもたれるんですよ)

と思った。まあ、言っても自分は相応しくないと

断るんだらうなとわかっまでもいるんです

けどね。

sharpとオーロラも領いている。

ブラウンテイル家領内

「そう、こつちにも来たのね。」

出迎える準備をしようだいたい

スキウース ユカタンいるかしら？

ラタトスは二人を呼ぶ。

スキウースは自分の妹であり、ユカタンはその夫である。

「ロドスってドクターのやつがいた所よね」

「ああ、そうだね」

騒動の時に夫であるユカタンが捕まった時はドクターのおかげで助ける事ができた。

だから信頼している。

「話を聞いてから判断するわ」

通された一行がやってきた。

献上品をもらう。

「あら、お酒ではないのね」

キラツと光る宝石類。

「身だしなみに使うも売るも好きにしてください」

家々を訪ねることの許可を出した。

結果はペイルロツシユ家と同じ。

「ねえ、貴方は何しに来たの？」

店を構えに来ただけじゃないんですよ」

「ん、確かにそれだけではないですが問題を起こしには来てないです。

できれば仲良くしたいですね」

「それはあなたの行動次第ね」

「なるほど、なら問題はないですね」

敵対なんて絶対したくないし。

シルバーアツシユ家は行かなくて問題はなし。院の巫女に会うには長老達が許可しないと

会えそうにないから、信頼を得てからにしよう。
皆で建物に戻って、今日はキムチ鍋だ。